

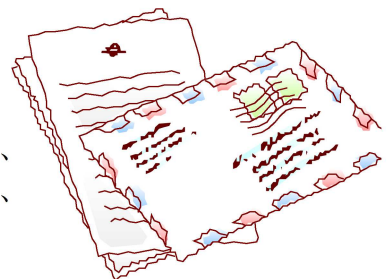
青木君は偉い！こんな生き方もある…



○「もしもし、青木先生、お久しぶりです。来週の土曜、遊びにうかがってもいいですか」約束の土曜夕方、愛妻を伴って、青木君が拙宅を訪れた。青木君とは数年ぶりの再会である。「今日は一杯やりながら、とことん語り合しましょう」こうして、政治のことや特別支援教育のこと、懐かしい昔の盲学校時代のことなど、お互いの細君が側にいることも、時の過ぎるのも忘れ、夢中で語り合った。

○青木君はN市に生まれた。私と同じ姓だが、勿論兄弟でも、親戚でもない。地元のK中学校に入学した頃から、網膜色素変性症という眼疾のため急速にその視力を失い、N盲学校の高等部普通科1年に入学してきた頃は、視力は0になっていた。私が君のクラスで『現代社会』を教えていた頃が、君の荒れた状態が最も酷かった時期だったね。君はそれまで見えていた光の世界をほんの数か月間に急速に失ったため、その運命を受け入れられず、自暴自棄となり、よく私に食ってかかっていたね。私の『現代社会』の授業は、いつも君と私の喧嘩に終始していた。他の生徒は毎回の君と私のやり取りを聞いて、さぞやうんざりしていたことと思う。

○しかし、2学期の頃から、君は変わっていった。君は、「何故人間は生きるのか?」「人間の生き甲斐とは何か?」「青木先生の生き甲斐は何か?」などの難問を突きつけて、私を苦しめた。あの頃は私も今より真面目に生きていたし、ヘーゲルやサルトルらの哲学書、ラッセルやヒルティナーらの幸福論の本を手当たり次第に読み漁っては、君の難問に



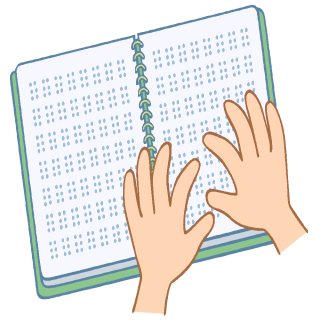
応えようと必死になっていた。でも、どうも十分には応え得なかったように思う。そうこうしているうちに、私は地元の中学校へ転勤となってしまった。

○私は荒れた中学校に赴任し、青木君のことなど全く気遣うゆとりもない程、四苦八苦して落ち込んでいたある日、突然に君から「青木先生、会いたい。M町に遊びに行っていていいか?」という電話が飛び込んできた。「先生、俺は盲学校の専攻科に進学して、盲人(=視覚障害者)の伝統的な進路である鍼灸師の資格を取って治療院を開業するという、三療の道には進みたくない。できれば、大学に行ってみたい」と君はぶっきらぼうに言い出した。私は内心“今の青木の学力じゃあ無理だな…”と思っていたが、黙ってうなずいて聞いていた。「何を勉強するの?」と尋ねると、「先生みたいに歴史を勉強したいけれど、無理だと思うので、盲人でも何とかできる英語を勉強したいと思う」と君は答えた。私はきっとどこかの時点で大学進学を諦めることになるだろうと思いながらも、「青木、精一杯頑張りな…」と言って、別れた。

○青木君は高3の卒業間近に、K大学英米語学科を受験して、案の定落ちた。

しかし、諦めなかった。盲学校高等部普通科を卒業した後、京都にある予備校に1年

間通った。全盲の君は、たった1本の白杖を頼りに、下宿から予備校に休まず通った。気が狂ったように勉強しだした。翌年、K大学の比較的入りやすい夜間部の英米語学科に合格した。大学3年になり、今度は全日制の英米語学科への転科試験を受けて、見事合格した。この転科試験は大変な難関だったらしい。それにしても、全盲の学生が独りで生活し、しかも英語を学問的に勉強していくというのは、並大抵の努力でできるものではない。たった1冊の英和辞典でも点字に訳されたものは、20巻近くの膨大な量になるのだ。さらに、点訳された本の数は当時はまだ少なく、読みたいと思う本が点訳されていない限り自分では読むこともできない。にもかかわらず、青木君は英語検定の1級も取得した。卒業論文も素晴らしいものを書き上げた。



○大学4年の時、高校の英語教師になりたいと思い、K高校で教育実習もやった。でも、全盲の君が教師として採用されることはなかった。ここで君は挫折したかに見えた。でも、君はへこたれなかった。今度はアメリカのSW大学大学院に留学すると言い出した。そして、見事難関試験に合格し渡米した。渡米していた2年間について君は多くを語らないが、私の想像を遙かに超えた苦難の連続を乗り越えてきたことと思う。2年間の渡米生活の果てに、君は言語学の研究により、修士号を取得してまた日本に戻ってきた。現在の君はN市議会議員として、都市の整備や障害児者の福祉や教育の向上を目指して、白杖を頼りに日夜東奔西走している。

○青木君から聞いた体験談で、もっとも鮮明に脳裏に残っているのは、「日本の大学は、（青木君を受け入れるにあたり）これもできないし、あれもできない…、それでもいいですか？と、できないことを並べ立てて説明する」それに対して、「アメリカの大学は、（青木君を受け入れるにあたり）あなたの学ぶ目的を達成するために、私たちは全力でサポートします。何なりとも要求してください！と、前向きな協力を約束してくれる」、という言葉である。君はアメリカに渡りこの言葉に接し、障害者としての自分を、初めて肯定的に捉えることができるようになったと語っていた。昨今、日本でもインクルージョン（共生社会）という言葉が流行っている。日本ではインクルージョン（共生社会）がいつ実現するのだろうか。私が生きているうちに実現するのだろうか？また、君に会って、君の見解を聞きたい。次はいつ会えるだろうか？

○私が、N盲学校高等部普通科1年のクラスで初めて君と顔を合わせてから、30余年の歳月が流れる。君は本当に逞しくなったし、柔和になった。君のそのいつも遙か彼方を見つめたような優しい眼差しはあの頃と少しも変わるところがない。私は君と相對していると、嘘や冗談が言えなくなる。私の心の内がみんな君に見透かされているような錯覚に陥ってしまう。もし、君が光の世界を失わなかったとしたら、今と同じ人生を歩んでいただろうか？と時々考えることがある。君も孔子の言う不惑の年を過ぎた。今後、君はどんな茨（いばら）の道程（みち）を歩んでいくのか。私はそっ

